

ほりかわけんちく展 2025.2.1~2.16

中村瑞希さん、本田なおみさん、三島奈月さん、藤本ももさんインタビュー



一覧についてお聞かせください。

京都美術工芸大学の授業課題として制作した作品を展示しています。

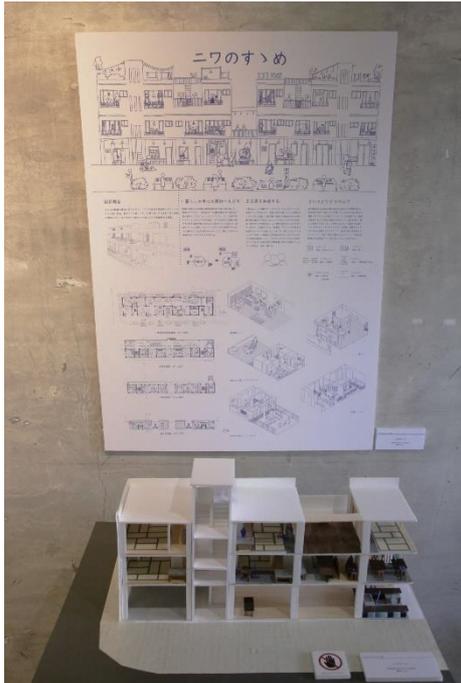
「住み続けられる公的市街地住宅団地の再生」をテーマに、堀川団地のリノベーション計画を行いました。有志が集まった学生4名の模型、パネル。そして、堀川団地の復元模型を展示しています。

今回初めて、リノベーションをテーマにした設計を考え、大学以外での展示を行いました。広報にまつわるテキストやパンフレットも、失敗を重ねながら手探りで制作したものです。

一作品について、それぞれお聞かせください。

藤本もも 《ニワのすゝめ》

藤本ももさん：堀川団地の敷地調査に行った際、住民の方やお店の方たちのコミュニティが豊かに生まれていることを感じ、魅力的に思っていました。ですが調査を行うなかで、かつてあったコミュニティが失われつつあることに気づきました。そのことが心に引っ掛かり、昔のように豊かなコミュニケーションを生み、コミュニティを再生させるような建築設計を考えました。テーマは「庭」です。



藤本もも 《ニワのすゝめ》

たとえば、路地裏とバルコニー。

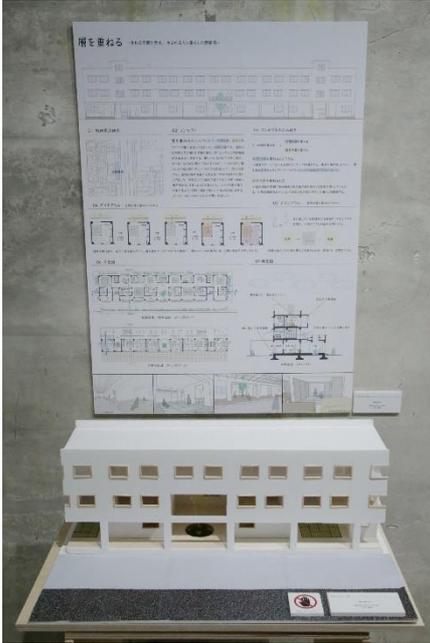
昔は洗濯物を外に干せたのですが、今はプライバシーを守るためになくなったそうです。私は、そこにもコミュニティがあったのではないかと想像しました。路地裏とバルコニーに庭、そしてデッキをつくり、かつてあったかもしれないコミュニティを再生することを試みています。



◀模型を横から見ると、団地の断面をみるような視点となるので、実際の団地を覗き込むような視点になることがポイントです。

中村瑞希《層を重ねる——重なる空間と歴史、生まれる人と暮らしの距離感——》

中村瑞希さん：私は、「空間の層」を重ねることと「歴史の層」を重ねること、二つの層に注目して設計しました。「空間の層」は、建具（ドア、和室の襖など）を一つの部屋（層）の区切りとして設置します。その並んだ建具を開けていくことで層の重なりが可視化され、区切られていた空間がどんどん広がり、内の空間と外の空間が繋がっていくように設計しました。



中村瑞希《層を重ねる——重なる空間と歴史、生まれる人と暮らしの距離感——》

また、「歴史の層」は、調査の際に、畳の上に座る生活（床座）から椅子に座る生活（椅子座）にだんだん変化したということを知りました。その移り変わりに注目し、床座と椅子座のどちらもが共存したような設計を計画しました。

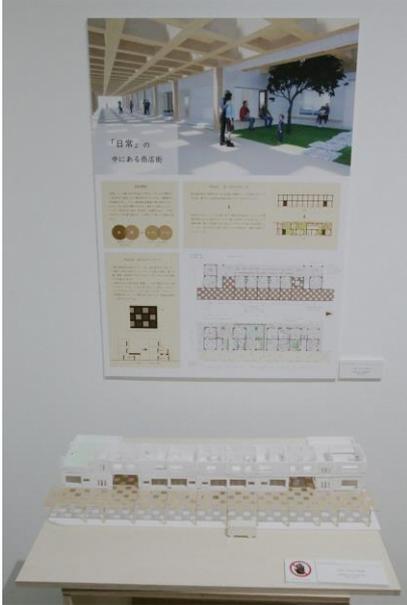


店舗に土足で上がるのではなく、畳づくりで靴を脱いで上がる設計にすることで、どこでも座り込めるような空間にしたことがポイントです。

本田なおみ 《「日常」の中にある商店街》

本田なおみさん：私は、日常という繰り返される日々のなかに、一つの繋がりを生むことをテーマにしました。

たとえば、商店街の人とお客さん。そのお客さん同士。また、住民同士との繋がりをこの設計に表しています。

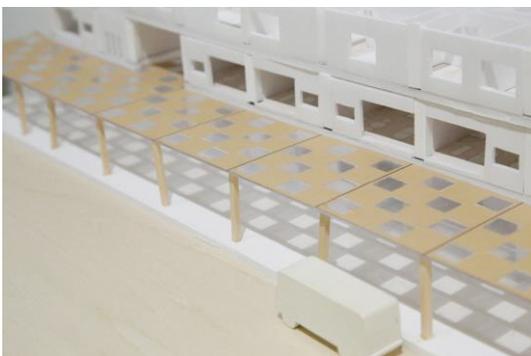


本田なおみ 《「日常」の中にある商店街》

まず、お店へのアプローチです。

堀川商店街の1階部分は、住居と店舗が併設されているため、出入口部分は歩道に向けての1箇所だけです。しかし、複数の場所に入出口を設けることで、様々な場所からアプローチできる仕組みにしました。

そして、テラスや庭を各所に設けています。たとえば帰宅するとき、真っ直ぐ家へと向かうのではなく、あらゆる場所にベンチを設置することで、商店街の中でも休むことができ、いろいろな人とのコミュニケーションが生むことが目的です。



また、「歩けるアーケード」を考えました。今のアーケードは、平坦で彩光があまり差し込まず、暗い印象を受けます。そこで格子のように梁を交互に組み、ガラス部分を作ります。さらにその上を歩けるようにすることで、2、3階の人たちが商店街の賑わいを感じることができるよう設計しています。

三島奈月《散らばって泊まる、アートと生活する堀川》

三島奈月さん：私は、京都モダン建築祭の学生スタッフとして参加させていただいたこともあり、ここ2年ほど堀川団地に通っています。その時に感じたこと、問題点も設計に活かしました。この敷地周辺は観光地でありながら住民の基盤でもあるような、ふたつが融合した場所だと思っています。



三島奈月《散らばって泊まる、アートと生活する堀川》

堀川団地では、「アートと交流」をテーマにさまざまな取り組みをされています。

ですが、初めて来させていただいたとき、正直その雰囲気あまり感じられなかったんです。実際行われている活動が、うまく発信できないようなもどかしさがあるのかもしれないと思いました。

交流はもちろん大切ですが、その前に、ここに住んでいる方たちの生活が大切です。そこで、住民の方々の生活にアートを、というポイントを設けました。

そして、地域性を活かした設計がしたいと思い「分散型のホテル」と「アートと生活」の2点をテーマに設けています。

分散型ホテルは、空き家や古民家を改装されるケースが多く、寝泊まり以外のお風呂、食事、観光といった役割を、町や商店街に分散させることをいいます。

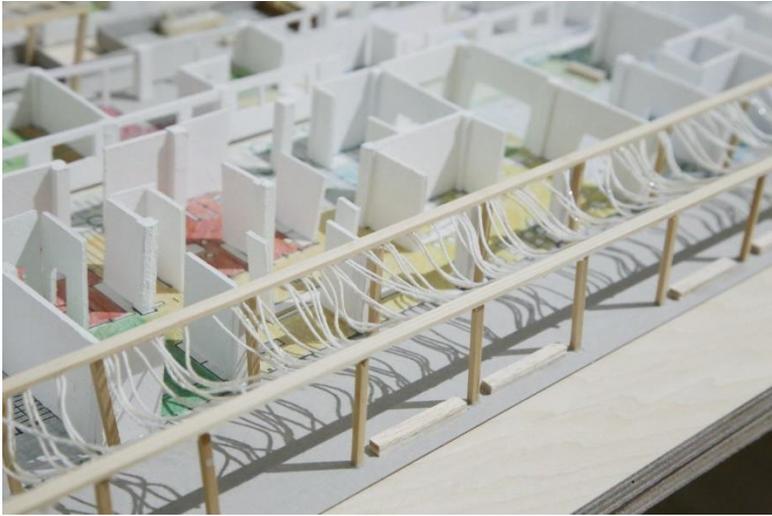
堀川団地に分散型ホテルを建てることで、学生、留学生、社会人、アーティストなど、様々な人がここで暮らすことを目的としています。

たとえば、アーティストが作業をする空間。ここで生活をしながら、制作、発表まで行う空間を作り、そこに地域の人巻き込むことが、設計のコンセプトです。

注目していただきたいポイントは、模型をすべて手書きで制作したことです。色鉛筆で色付けをして、とてもカラフルになりました。そして立体での計画ではなく、平面での制作にしたこともポイントです。

ーアーケードは糸でできているのでしょうか。

三島奈月さん：アーケードには、西陣の織物を思わせるような糸を用いました。以前住民の方が、アーケードを歩いて、「上を見上げたことがないなあ」と呟いていらっしゃるのを聞きしました。見上げたくなり、かつ地面には影の動きも見えるように設計しました。



ーみなさんが建築に興味を持つきっかけとなった出来事は何ですか？

藤本ももさん：中学生の時、国語の先生からいただいた「愚直に生きなさい」という言葉が忘れられません。制作でも、ひとつだけやりたいことを決めて突き通す、そして素直に物事を受け取るということを心がけています。これは私の制作、生き方のモットーになっています。

中村瑞希さん：建築に興味を持ち始めたきっかけが、自宅のリフォームというリノベーションに近いものでした。今回の課題も親近感を持ちながら取り組むことができ、生活実感を重ね合わせながら設計しました。

本田なおみさん：私はもともと絵を描くことを三年間学んできたので、建築にあまり馴染みがありませんでした。大学のオープンキャンパスで、建築について知ったとき、これまで自分が好きだった数学や絵が繋がったように感じました。

昔、学校の展示会で選抜に選ばれなかった、悔しい経験がありました。翌年、風景画の選抜展では絶対に選ばれたいと思い、努力しました。その経験が今の制作活動の糧になっています。

三島奈月さん：私が「建築」に惹かれる理由は、1つの要素に対していろんな角度から見ることができることです。

たとえば、建物の構造を扱うことや計算が難しそうといった印象だけに留まらず、地域のまちづくり、それに加えて歴史や哲学的な考え方など、あらゆるものを含んでいます。そういった複合的な要素がギュッと詰まったものが建築だと思います。美術館の建物だけでなく、その中で展示されている作品も建築のひとつに構成されるような。それが、漠然と建築が好きな理由です。



Gallery2122 での展示の様子

—今後の活動についてお聞かせください。

藤本ももさん：自分のやりたいことだけではなくて、利用してくださる方のためになにができるのか、という視点を持ちながら設計を考えることを続けていきたいです。

中村瑞希さん：暮らしや気持ちに寄り添いながら、役に立つ建築ができればいいなと思っています。

本田なおみさん：物、空間、人のなかで、どういう物語が生まれているのかを想像し、大切にしながら設計していきたいです。

三島奈月さん：堀川団地に関わったことで、地域に密着することに興味を持ちました。このローカルな京都の文化を身に感じながら、まちづくり、建築の関係性に興味を持っており、そういったことを卒業制作で活かしたいなと思っています。仕事じゃなくても、生活や地域のコミュニティ、自治会とか、建築で学んできたことをいつか活かせるんじゃないかなと、学んできたことが繋がるといいなと考えています。

(取材日：2025年2月1日)